

はじめに

学校の主役は言うまでもなく、そこで学ぶ子どもです。子どもはそれぞれ異なった個性をもちながらも、互いに助け合い、協力し合い、時には競合しながら自己形成していきます。そのように互いに影響しあいながら、子どもは一つの個性ある学校社会をも形成し、それと同時に、その学校社会からもまた有形無形の影響を受けています。このように見ると、子どもの積極的な、そして複雑な日々の相互作用に起因する学校活動は、最近、21世紀の科学と称され注目されている「複雑系の問題」に帰属するように思われます。複雑系の科学では、その構成要素の一見乱雑ともみえる相互作用がある条件下で組織化、あるいは構造化を現出するということが指摘され、これを創発（emergence）と呼んでいます。本校は、個と全体の双方向のかかわりが活発になって、新たな個と全体が生み出されていくような、活力あふれる学校をめざして、日夜努力しておりますが、そういう点で、本校のめざす学校はまさしく「創発のある学び舎」であります。本校はそのような観点に立ち、昨年度に引き続き、その学び舎でのめざす子どもの姿を求めて学校教育の実践的研究を行ってきました。

具体的には、道徳も含めた教科学習、総合学習、そして特別活動の三つの学びの場を設定しています。教科学習では、子どもがその本質に基づいた基礎・基本を習得していく中で、更に「ひと・もの・こと」に対して、各教科に応じた積極的な働きかけをする手だてを追求し、かつその有効性を検証してきました。総合学習は、共に生きる社会や環境に自らかかわって、よりよい生き方を求めようとする子どもの姿の追求を目的とし、主として三つの領域からなっています。第一は、総合領域で、人間、環境、文化の三つの視点からの学習を、主に学級単位で年間計画を立てて進めてきました。第二は、かしわ選択ゼミで、これは、教科や総合学習の発展的なテーマと、生涯学習につながるテーマから選択して行う子ども主体の活動です。5、6年生を対象とし、子どもの知的探求心や好奇心、そして科学する心の養成をねらっています。そして第三は、5名の英語指導助手とのコミュニケーションを通して、ネイティブ英語に慣れ親しむことを主眼とした英語活動です。今年度は、益々高度化する情報化社会をにらみ、コンピュータやデジタルカメラなどのデジタルメディア機器の効果的な活用方法の学習も総合学習で行ってきました。最後の特別活動では、自分たちの学校を自らより豊かで楽しくしていくことを目標にしています。その中の児童会活動では、目標に迫るために学校生活において何ができるのかを子ども自身が考え実行するプロジェクトふぞくと称する活動と、日々の清掃活動を中心とした異学年小集団によるたてわり活動を行ってきました。そのほか、子どもが自分の活動を振り返ることで自信を持ち、次なる活動にむけての意欲を持続、向上させるようにと、昨年度に引き続き、全教科の単元の過程に自己評価活動を位置づけています。

近年、いじめ、不登校、学力低下、学級崩壊など、学校における諸問題も多様化してきております。それらを解決すべく様々な改革が提唱され、実行されておりますが、その改革が正当であるかどうかの判定は子どもの成長を待たねばならない場合が多く、そこに教育改革の難しい点があると思われれます。そのような状況下で、本校は、絶えずより良い学校教育を求めて実践的研究を行ってまいりました。この研究紀要はその成果の一つであります。ご高覧いただき、忌憚のないご意見とご指導を賜りますようお願い申し上げます。

平成15年11月20日

金沢大学教育学部附属小学校
校長 畠中洋志